教養教育に関するフォーラム――
大学教育の質の改善のために パート2

学長 小川 秋實

第6回の教養教育に関するフォーラムは，1998年11月5日・6日の両日，乗鞍高原あずみ荘において，全学から教官18名の参加をえて開催した。今回は講師に広島大学総合科学部長・生和秀敏先生を迎え，先生の話題提供と質疑討論という形で進めた。大変熱心な討議が行われ，その内容は信州大学の教育改革に役立つものと思うので，その概要を報告する。

講師の紹介

生和秀敏（せいわ・ひでとし）先生は，広島大学教育学部心理学科を卒業されたのち，広島大学教育学研究科修士課程終了。昭和60年，日本行動療法学会学会賞受賞。昭和63年，文学博士。広島大学・学校教育学部助教授（障害児心理学）を経て，平成元年に総合科学部教授（パーソナリティ論），平成7年から同学部長。広島大学の教育改革のリーダーシップを取られ，同時に学会活動として，大学教育学会理事，日本行動療法学会理事，日本行動医学会理事など，多数の学会の要職を務められている。

話題提供（生和秀敏先生）（第1日午後）

「教養教育の理念と目標」

教養教育のコア・カリキュラム化について纏めているので，それを中心にお話したい。現在，教養教育がどのように捉えられているかというと，理念と目標がはっきりしない。100人100通りの考えがある。現在は教養科目のなかに音楽・美術が入っていないが，昔の人には信じられないことだ。教養教育の理念・目標は人によって異なるし，時代によっても異なる。

現在から21世紀初頭の教養教育は，第一に，「教養主義と修養主義の統合」。教養主義は，ヨーロッパ型の文化の伝承，つまりオールド・リベラリズムで，エリート（15%）が戦前の高等学校でやっていた。歴史上の文化文明の吸収だ。ところが，現在の学生は，和辻哲郎の書物は100人中4人しか読んでいない。これに対して，修養主義は市井の教育観で，行動に裏打ちされたもの。つまり体験と訓練による人格の陶冶。従って，オールド・リベラリズムを虚学とみなした。これからは，教養主義と修養主義の両者を融合することが大切な時代だ。

第二に，「時代精神を受けた教養教育」。国連は21世紀における全人類的課題として，ヒューマニズム(人間性の回復)，グローバリズム(国際社会との共存)，ナチュラリズム(自然との共生)を掲げている。これからは，世界がこれらを共有していく時代だ。ディシプリンを中心としないものへの再編成が必要だ。

第三は，「新しい価値の創造を目指す教育」。自己実現から共生へ。学術と社会との開かれた関係へ。自分のやっていることが社会と結ばれていることが必要だ。大学審議会の答申に

もあるように，国立大学は，国民の期待に副わなければならない。

「コア・カリキュラム」

教養教育は通常のカリキュラムに馴染まない。特に文系はでたらめで，シラバスを書けない。何を教えたかは，その場にいなければ分からない。ハーバード大のコア・カリキュラムは，教養人に欠かすことができないものを16くらいコアにした。各大学で開設されているコア・カリキュラムのテーマは，「記号とコミュニケーション」，「芸術と社会」，「西洋文明の3大危機」，「アメリカの大統領制」，「地球と生命の歴史」，「心理学と宗教」，など。特定のディシプリンはコアにしない。学問的成果が他の学問とどう繋がるか，社会とどう繋がるか，未来とどう繋がるかを考えさせる必要がある。このインテグレーテッド・コア（総合必修科目）を教えることが教養教育だ。ディシプリンを残しては教養にならない。

「パッケージ別科目」

世界や人類が直面している課題を学際的・総合的に判断できるよう複数の授業科目を有機的に関連付けた授業科目群。「知の根源」，「人間の自画像」，「制度と生活世界」，「国際化と異文化交流」，「科学技術と環境」。一つの授業に意味を持たせるのが難しいので，幾つかの授業をグループにした。しかし，このやり方は今は失敗したと考えている。タイトルが茫漠とし過ぎて，学生は理解してくれなかった。平成12年度から，3科目をワンセットにして，より教育内容が明確になるタイトルを付ける予定。

「コモン・ベーシック」

今の学生がどういう集団であるか考えなければならない。全ての学生に共通して教えなければならないものがある。

国際化・情報化に対応して，コンピュータ・リテラシーと英語運用能力が必要。

大学大衆化に対応して，小人数のゼミ。自習力や提示力を培う。広島大では285コマ開設して必修にしている。京大では選択のポケットゼミを開設している。小人数ゼミはマンネリ化すると専門ゼミになりがちだ。ゼミでは教師がしゃべらないことが大切。

科学的思考訓練のため，理系文系を問わず，実験・実習プログラムが必要。どういう内容なら学生が関心を持つか考えなければならない。

大学教育に感性に訴えるものが必要。新しいものは感動を伴って生まれる。カリフォルニア大学のバークレイ校では，ヌーン・コンサートをやっている。広島大ではまだだが，大学のトータルの活動のなかに感性教育を取り込むべきだ。

質疑討論 その1

「教養教育のあり方と現状」

参加者：教養科目という特別なものがあると考えるか。

生　和：専門科目と教養科目の違いはない。コア・カリキュラムを担当する教師は，他の学問を知り，経験があり，という教師であるべきだ。専門教育は博士課程に移すべきで，専門は学部で教えるような簡単なものではない。社会は学部で教えるような専

門では相手にしない。

参加者：教養教育の改革を実現するためのプロセスはどのようなものか。

生　和：200人を集めて1泊で研修会をしている。グループに分かれて，教養の理念，パッケージの意味などを討議。経費は学長が工面した。来年の研修では，情報と外国語を予定している。

参加者：広島大の総合科学部は教養部を改組したものだと思うが，教養教育にどれだけ関与しているのか。

生　和：現段階では教養教育の90％以上を担当している。全学協力方式なので，他学部は10単位くらい担当することを目標値としている。

参加者：他学部教員の教養教育への熱意はどうか。

生　和：熱意はない。教養が大事なことは分かるが，専門も大事だという。学部によって濃淡はあるが。そのため，総合科学部の負担は大きい。しかし，学部教育のあり方が変わるので，従来の形はやれなくなる。学部教育はベーッシク中心となり，各学部共通のものが増えるはずだ。教養ベースにしないと学部はやっていけなくなる。東大は教養に最も熱心な大学で，見える形で改革している。広島大は教養ゼミが見える形。学生からの評価は歴然としている。

参加者：教養教育の期間は。

生　和：1年半。カリキュラムは全学共通のものを最優先している。

参加者：単位制度のあり方をどう考えているか。

生　和：単位制度についてきちっと議論してない。予習しない学生に単位の安売りがされている。単位制度が本当によいのかは問題だ。授業で1日4コマを埋めているようでは単位制度ではない。教育目標の実現には単位制度は止めたほうがよい。単位制度を厳密にいうなら医学部・教育学部は専門学校に戻らなければならなくなる。

「大学教育のあり方」

参加者：4年制大学は教養化し，専門は大学院へというのは，社会が求めているのか。

生　和：進学率の上昇が最大の理由だ。

参加者：学生に媚びることか。

生　和：2007年には大学全入時代になる。その時の学生のレベルは以前とは違う。今は，工学部出が電柱に登って碍子を交換している時代だ。学生は授業料を払って来ている。この期待に応えなければならない。工学部も職能教育というが，少しずつ変わってきている。

参加者：専門教育は人間性と無縁のように受けとめているが。

生　和：先端的科学技術をしていると，土日を休むと置いてきぼりになる。専門だけに走らざるをえない。

参加者：学部卒のレベルが国際的レベルとずれることにならないか。

生　和：高校数学は現状の70％に下げて欧米に一致する。高校がグローバル・スタンダードになったので，それを受けて大学が教育すべきだ。工学部は早くから専門分化させたので，他に転用が利かなくなった。基礎のトレーニングをしっかりやる必要があ

る。なお，広島大では，この４月から入学１年後に学生の10％を学部間で動かすことにしている。将来は学部をばらしたい。難しいことと思うが，学生にとって学部が本当に必要か考えてみるべきだ。

「教員の採用条件」

参加者：理想的な教員とは何か。現状は業績で採用しているが。

生　和：一定レベルの業績は必要。その上は，面接，教育観などによって採用している。

参加者：教育について客観的に評価するシステムが必要では。

生　和：そうだが，難しい。総合科学部では，応募する理由を書いてもらっている。採用側も採用条件を明示する必要がある。学生を社会に出すと評判がフィードバックされてくる。

参加者：大学院専任の教師は居るのか。

生　和：大学院専任でも教育を担当する条件で採用している。教養教育は，人文学だけでは駄目。理系のものをいれる必要がある。リアリティを持ってアプローチできるものが要る。大学院の教師のほうが，教養の必要性を感じている。高い山に登るには，それなりのバックグランドが必要だ。

質疑討論　その2（第１日夕食後）

「教養教育と専門教育の関係」

参加者：教養が専門の基礎にあるような感じを受けたが，専門と基礎は平行してあるのではないか。それを融合する形が必要なのではないか。

生　和：専門と教養を区別することは意味がない。教養部を壊したのが学生紛争だし，オウム事件では，専門家として優れているのにブレーキを掛けられなかったのは何故か。専門外の世界を知り，自分で物事を考える必要がある。コモン・ベーッシクだ。教養教育は高年次にもあってよい。カリキュラムにおける配置の仕方が重要だ。

参加者：今の学生には教科書も教えられない。日本の大学は勉強させていない。学部で専門性を抑えると，グローバル・スタンダードに合わなくなるのではないか。

生　和：専門の基礎を徹底的に教えるべきだ。外国では授業がこんなに詰まっていることはない。これでは予習復習の余裕がない。どうしても教えるべきことは教えなければならない。これを明確にする必要がある。自分の専門分野を何でも詰め込もうとすることが専門教育とはいえない。百科事典と同じでは何の意味もない。一冊じっくりと読ませる。これには授業が多いのが問題だ。今の学生は問題の発見もできない。

参加者：質の保証の点で，専門資格試験に不合格では批判される。教養にも不合格者が出てよいと思うが。

生　和：カリキュラムの概念は教養にはなかった。人文系は授業がバラバラに存在し，体系化を学生に求めていた。教育目標は，本来は学生が立てるものだが，今は一定のものを明示しなければならない。教育目標が明確でないと，評価基準も作れない。目標達成に相応しいカリキュラムを明示すべきだ。物理・化学を易しく話すのが教養ではなく，それらをどう活かすかが教養の狙いだ。

参加者：専門と教養を分けるのがおかしいのでは。
生　和：大綱化で，その区別はなくなっている。

「全学協力体制」
参加者：教師は専門と教養の両方に携わるべきだが，教養担当教師は出口まで責任を持てないのでは。
生　和：全て責任を持つ体制になっている。両方できなければ教師になれない。本当にリアリティのある授業をすべきだ。学生にとって何が最も大切かを考え，学生が将来を拓り開くための授業をやるべきだ。
参加者：コモン・ベーッシックが大切だと思うが，教員の質も大切だ。最先端の学問をやっていると教育が疎かになる。両方は不可能ではないか。
生　和：研究者として素晴らしい人がよい教育をやっていることがある。研究的ベースなしでは，よい教育はできない。

「学生の質」
参加者：どういう学生が面白いかというと，受験勉強をしていない学生だ。科学的思考を大学でやるのは遅過ぎるのでは。
生　和：気が付いたときからやらなければ。ある時から突然できることがある。教師はそれを信じなければやっていけない。
参加者：教えても通じない学生が多いが。
生　和：だからコモン・ベーッシックが大切だ。
参加者：市場原理との狭間で悩む。学生は専門だと目を輝かす。英語にはアレルギーだ。
生　和：高校生はディシプリンを信じている。しかし，生物学と化学に線を引けなくなっている。理系・文系というのは意味を成さなくなっている。これは高校の先生にも責任がある。高校の先生に今の大学を知っていただきたい。高校では従来型の決まりきったガイダンスをしている。

「学生の授業評価」
参加者：学生の授業評価についての意見は。
生　和：学生による評価は多くの大学で実施している。新聞に公開している大学もある。大勢の学生の評価は正しい。自信のある教師は学生の評価におびえない。ひどい教師を守る必要はない。ピア・レビューは，いいところを知るためにやる。外部評価は，私学が熱心だ。卒業生などをレビューアにしている。抵抗のない形で人の授業を聴くことはいいことだ。広島大では，全学部長の講義が聴ける。

「大学の個性化」
参加者：専門教育には個性はない。個性化は教養教育にある。大学の個性化には教養の理念が大切になるのでは。
生　和：その通り。蛸つぼでなく，別な集団と考えることが必要。教員には，ことある毎に

理念を説くしかない。

参加者：大学は無能集団だ。その前提でやるべきだ。実際の作業を通じて感動を与えるべきだ。

参加者：大学人には効果と効率観念が欠けている。

参加者：広島大には危機意識が強い。信大には危機意識がない。アメリカ的なリベラルアーツ・カレッジ型に向かうのは止められない。生和先生の示された方向しかない。

質疑討論 その3（第2日午前）

「学生への動機付け」

参加者：学生のやる気を引き出す努力が必要なことは分かる。工学系では，物理・化学など無味乾燥な授業がある。これで学生のインセンティブを失わせてしまう。

生　和：初めから物理・数学を教えるのではなく，先端的なことを紹介して，それを理解するのに基礎的なことが必要なことを分からせる。基礎からスタートすべきでない。やっていることの意味を分からせることだ。

参加者：うちの学部では補習教育が必要だと思っているが，理系学部でも温度差がある。文系では必要性を感じていないのではないか。他大学では退職教員に依頼して補習教育をやっているが。

生　和：広島大ではクラス編成を工夫して対応している。単位認定を伴わない補習教育はやっていない。

参加者：1年後のレベルが違うことになるのではないか。

生　和：その通り。

参加者：勉強してこない学生にどのように対応しているか。

生　和：テストしてから，アドバンスト・クラスを奨めるようにしている。補習をやり過ぎると大学教育が問題になる。動機付けが大切。分からなければ聴くようにさせる。教養ゼミでは，今まで学んでこなかったものにチャレンジさせる。脳の活性化には感動が要る。情報は単にトリガーに過ぎない。個々の知識の補習ではなく，自学自習させるようにすることだ。

参加者：教養ゼミの様子はどうか。

生　和：教師は熱気を持ってやっている。うまく行っているクラスとうまく行かないクラスで意見交換している。全体として稀に見る成功だ。知(＝考える)，動(＝実行する)，説(＝説明する)を学ばせている。コモン・ベーッシックと同じ考えだ。身の回りの問題を取り上げ，これを素材にそのバックグランドになる学問をやらせる。たとえば，経済白書を見る。その中に問題を見ていく。

「教育の国際水準」

参加者：学部は基礎を作るというが，まだ社会は専門性を求めている。専門としてのエッセンシャル・ミニマムは何か。

生　和：専門のレベルは，それぞれの領域で違う。専門を大学4年でやれるというのは幻想だ。

参加者：基礎をやることと，国際水準と相容れるのか。
生　和：学部の国際水準とは，自分の意見を伝えることができる，他の意見を聴くことができるなどのこと。学術水準という意味ではない。
参加者：新入生ゼミで学生を山に連れていったが，2時間半受験勉強の話だけだった。答のない問題にアプローチさせるには，何をすればよいか。
生　和：京大では，「高校までに学んだものは嘘だから忘れなさい」という。新しいものを入れるには，古いものを忘れるようにする。
参加者：アメリカにはスピーチの授業がある。日本語できちっと話すことが不足ではないか。
生　和：日本語でちゃんと話せなければならない。日本人は人に意見を言うのは悪いことと考えている。話すトレーニングが必要だ。教師は黙っていることだ。授業中私語が起きる教師と起きない教師がいるが，私語が起きる教師はプロではない。

「達成目標」
参加者：教師の達成目標より遥かに低い達成度になるが，これをどうやって教師に納得させるか。
生　和：これは教師の自己弁護だ。教師は教えるトレーニングをしてこなかった。まるで無免許運転だ。考え直さなければならない。
参加者：教えることを減らすと教師は不安だが，学生は生き生きして来る。
生　和：違った価値観がいる。
参加者：学生は受験勉強を終えると不安になる。新しい世界に飛び込むことが不安になる。頼れるものが要る。
参加者：見かけの力ではなく，本当の力を付けることだ。大学は18歳で入らなくてよい。自己学習できるときに入ればよい。
参加者：自分の授業は，社会人相手なので目線を下げている。教えるという態度は取れない。どうすれば国際性が持てるか。
参加者：異文化コミュニケーションという専門分野では，すでにそのようなことを研究している。体験を通して気付くことが大切だ。
生　和：これからは教育ネットワーク造りが必要だ。大学だけが知識の拠点ではない。
参加者：国際化と異文化交流のカリキュラムがあるが，具体的には何か。
生　和：留学生との交流が多い。
参加者：国際化というと英語と誤解されやすい。

「ファカルティ・ディベロップメント」
参加者：教師としてのトレーニングを受けていない。どうやって双方向授業にすればよいか分からない。ファカルティ・ディベロップメントが組織的に必要では。
生　和：広島大でもファカルティ・ディベロップメントは十分ではない。教育学部にお願いしても面白くない。違った社会の人に話してもらうとよい。
参加者：CAIと英語史とでは，学生の態度が違う。CAIでは目を輝かす。
参加者：英語史でもKJ法でやると，うまく行っている。

参加者：工学部でも研究室のレベルと２―３年生のレベルが違い過ぎる。２―３年生には教えても何の役にも立っていない。

生　和：腹が減っているときは店の匂いが気になる。関心を持てばいい考えが飛び込んで来る。学生に教材を作らせることも一つの工夫だ。

ま　と　め

講師から，これからの教養教育は如何にあるべきか，広島大ではそれをどのように行っているかについて話題提供された。参加者から，学部教育を教養と専門基礎だけにして国際基準に副うのか，専門性を身に付ける必要があるのではないか，勉強しない学生をどのように動機付ければよいか，研究と教育と両立できるか，など多数の質疑があり，講師から熱心に回答していただいた。広島大の教育改革のリーダーだけあって，自信と説得力に溢れた説明であった。参加者の多くはこれからの大学教育がどの方向に進むべきかを感じ取ったように思う。参加者の一人から指摘があったように，信州大学では教員の意識改革が十分とはいえない。このフォーラムが信大における教育改革の原動力の一つになることを願っている。

参加者：本部＝小川秋實，橋本功，人文学部＝加藤鉱三，教育学部＝伊原巧，小池浩子，高橋渉，理学部＝美谷島実，太田哲，医学部＝能勢博，工学部＝山下恭弘，吉田尚志，農学部＝建石繁明，只佐弘治，繊維学部＝青山弘，粂井資行，教育システム研究開発センター＝細野明義，杉野健太郎，医療技術短期大学部＝富岡詔子。